

錦織監督

映画の現場から



●○○●22

価値観の転換期に贈る心の映画「渾身」③

隠岐諸島は日本海の暖流と寒流が交差する所に位置しており、漁場としても日本一だと言う。

映画「渾身(こんしん)」で主人公の一人娘を演じてくれた子役の井上華月ちゃんが海士でのロケの合間に波止場で次々と大物を釣り上げて大喜びしていた。車両部の面々はロケが終わると民宿の前の岸壁から釣り糸を垂らし、毎晩のようにイカを釣り、スタッフを喜ばせた。風景の美しさが強調されがちだが、宿の前でイカが釣れる環境も隠岐ならではの光景。

宴会や夕食シーンで撮影に使う食材も見事だった。中でも地元のおもてなしが作ってくれた隠岐の岩のりで包んだぜいたくなおにぎりは本当においしかった。撮影用語で映画に使う飲食物を「消えモノ」と言うが、こんなぜいたくな消えモノが登場する映画は他にない。ウニやサ



映画「渾身」のワンシーンより

「解りにくさ」のすすめ

ザエ、イワガキをはじめ、シーンごとに映っている新鮮な魚介類も注目だ。隠岐は風景、環境、人情、食…どれをとっても世界有数である。「渾身」は観光映画ではないが、一シーン一シーンにそういった隠岐の魅力を感じてもらえる作品だ。

最近は何事かを解(わか)りやすく伝えなければと思うが故に(それ自体に異論はないが)、肝心のディテールが見落とされがち。解りやすくしようとしてかえって誤解を生むことも多い。根気がいるが丁寧に伝えていかなければ、と隠岐ファンの一人として心から思う。

解りやすさ、といえばインターネットやスマートフォンなど情報を得る手段が増しているにもかかわらず、日本は「余計な観光案内看板」が増え続けている。どうやら日本人は旅にも合理性や解りやすさを求めるようだ。分刻みのスケジュールをこなす旅を否定するつもりはないが、自分で組める旅やオプショナルが増えている昨今、思いがけない出会いがあるかもしれない旅や想像を超えた発見のある旅が求められている。

時代に逆らうかのように、解りやすく無駄なく目的地に行ける「親切な」看板が大好きな日本。看板をたどれば誰とも会話せずに目的地に行ける便利さの反面、触れ合う機会が極端に減る。道を尋ねられたら誰でも親切に教えてくれる人は日本には多いはず。あそこの店で、GSで、旅館で尋ねてみようという「動機」を起点に人と人の縁が生まれると思うと実にもったいない話ではないか。看板がない解りにくさから生まれる縁。しかも風景の邪魔をしないという、解りやすいメリットもある。

無駄なことのように、遠回りしたからこそ面白いことがあるのも「旅」の醍醐味(だいごみ)ではないだろうか。人生という「旅」もそうであるように、解りにくいことが悪いことばかりではない。

(錦織良成・映画監督)

—第2、4金曜掲載—